

万象亭の門人たち

——『田舎芝居』をめぐる——

石上 敏

天明七年刊の『田舎芝居』は、洒落本の通史が語られる場合、常に見のがすべからざる一冊として取り上げられて来た洒落本であり、恐らくこれからもそうであろう。

確かにこの、作者自らが野夫本と称する小本一冊は、単なる洒落本と言って片付けるだけでは済まぬ何程かの問題を抱えていること、既に諸先学の説かれる通りである。

本稿では、そのような『田舎芝居』が示唆する諸問題を、いまだ一度整理する為に、その前段階と言うべき基礎作業のひとつを行なう。即ち、『田舎芝居』の持つ、はめ言葉・序・本文・校語・後序・跋という構成のうち、作者万象亭の手に成る本文及び序以外に記された、竹杖為輕・森羅亭万倍・天竺老人・千差万別・七珍万宝・狐面堂柳郷という戯号が、すべて作者の仮号ではなく、この時点で実在する戯作者のものであることを証し、そのことの意味について些か考察を加えたい。^(注1)

一、竹杖為輕

万象亭の戯号としては、天明二年中成立の『江戸花海老』に「森羅万象も竹つゝ為輕翁と改て、猶此道にわけいらん事を思ふ」とあるのが時期的に早く^(注2)、天明三年正月刊の『万載狂歌集』にこの号で三首が載る。『江戸花海老』や『蜀山人判取帳』の記事から、万象亭が、いわゆる天明狂歌壇に参加したのは天明二年中（恐らく秋に催された戯作者の会）のことと思われるのであるが、翌三年正月には、芝居を中心に狂歌壇の重鎮たちを加えた『絵本見立飯簀尽』を編み、同四月二十五日には両国河内屋で著名な宝合の会を主催しており、同年七月刊とされる『狂歌師細見』でも、二十四名を擁する一派の頭領に置かれる（その中には次代の江戸狂歌壇を荷う狂歌師が少なくなかった）。狂歌壇に顔を見せてから僅か一年程の間にこれだけ派手な働きが出来たのも、奥医桂川家の出であることによるところが大きいだろう。但し、『狂歌師細見』の分類は多分に遊戯的な気分が強く、そこに見える万象亭一門の多くは同年四月刊の『狂歌知足振』には載らず、『万載狂歌集』『徳和歌後万載集』（天明五年刊）『狂言鶯蛙集』（同上）

といった狂歌集にも取られていない。

ともあれ、以後竹杖為輕の戲号は、竹杖翁等の変化を含めて「落栗庵狂歌月並摺」(天明三年)「老萊子」(万象亭戯作蘆船)「徒火以来記」(太平楽記文)「狂文棒歌撰」(小紋裁) (天明四年)「売鉄砲挑灯具羅」(徳和歌後万載集)「狂言鶯蛙集」(宝山金銀耐討)「俳優風」(天明五年)「吾妻曲狂歌文庫」(注3)(天明六年)や「狂歌狂文貼交帖」(蜀山人判取帖)と、狂歌・戯作を問わずに用いられている。従来、竹杖為輕は森島中良の狂名である、とされることが多かったが、彼自身には竹杖為輕を狂歌に限って用いるという意識はない。(「さうは虎巷」の刊年は留保。)

さて、天明四年刊の黄表紙「万象亭戯作蘆船」で万象亭の戲号を披露してからは、竹杖為輕の号が記されることは漸減していくのであるが、こと狂歌に関しては「徳和歌後万載集」「狂言鶯蛙集」「吾妻曲狂歌文庫」と、相変わらず竹杖為輕の名で取っている。これらと殆んど時を置かずに天明七年「狂歌才蔵集」「古今狂歌袋」にもまた竹杖為輕の名が見えるのであるが、これは二世竹杖為輕、本稿の文脈に即せば、「田舎芝居」冒頭で掛合いを演ずる片割れの竹杖為輕であった。

天明六年刊の万象亭作とされる黄表紙は、「阿房者役待」「大笑止者の鐘入」「景清塔の願」「仮名手本混會我」「七福神伊達の船遊」「四天王荆棘鬼噺」「もゝんじい」以上七部が知られるが(但し「仮名手本混會我」は年表類に記されるのみであり、未

見)、このうち「阿房者役待」(二冊)の五丁裏には「万象亭門人/竹杖すかる作」と記されている。これだけでは万象亭の趣向とも考え得るのであるが、その下に見える書判㊦を、万象亭が用いた例はない。のみならず「田舎芝居」の口絵に描かれた竹杖為輕の、扇子と着物にこの書判が見出せるのである。筆者の知る限りでは孤本である、大東急記念文庫蔵「阿房者役待」は袋入本であるが、年表類からこの作が天明六年刊であることは疑い得ない。即ち、既にこの時点で、竹杖為輕の戲号は中良の手を離れていたのであった。

翌天明七年刊の江戸名所絵本「絵本あつま鏡」上巻五丁裏には、「二代目竹杖為輕」と記され、二世為輕の存在は確実となる。この絵本を編んだ万象亭は、序文と付録「江戸名所取組」を撰ずるのみで、本編の狂歌・狂文は「名にし江戸絵師に筆を揮はせ。江戸ッ子の江戸訛を添しめて」(序)と、門人たちに任せている。よって下巻七丁裏の「竹杖為輕」も二世為輕と見るべきであろう。

同年刊「狂歌才蔵集」には、竹杖為輕作二首、万象亭作四首が収められる。このことが見過されて来たのは、例えば「狂歌角力草」(天明四年刊)に同一人の二つの戲号(大の鈍金無・進來船橋)が載り、「万載狂歌集」が「狂歌百首歌合」における池田正式一人二役の狂名平那実柿・布留田造を二つながらそのまま採るといった例、或いは修辭的配慮によって一集中に様々な表記を用いて狂名を記す慣例などによるものと思われるが、この場合は

明らかに、為輕と万象亭が別人であるための書き分けに他ならない。同年刊の『古今狂歌袋』につけば、事態は更にはっきりするであろう。前年刊の当代著名狂歌師一覽「吾妻曲狂歌文庫」の増補新版というべきこの絵本には、百人のうち四十番目に万象亭、九十二番目に竹杖為輕の肖像が見出せるのである。この絵本の性質に鑑れば、同一人の重出は考えられない。

以上の点より、『田舎芝居』の竹杖為輕が万象亭の仮号ではなく、實在の門人のひとりであることが知られる。とすればまた、『古今狂歌袋』や『才藏集』に載る「皆人のみどりと呼べる禿松大夫にならん色ぞ見へける」「おひねりの包むに余るわが思ひなど投げやりに人のなすらん」といった狂歌は、初代竹杖為輕の作ではなく、『狂歌袋』の為輕肖像も、中良の像として掲出することは出来なくなる。

前述のように、二世為輕の初見は天明六年正月刊『阿房者賢待』である。この時期、のちの判者森羅亭、山陽堂、花江戸住らを差し置いて為輕の号を譲られた者として適当な名を、筆者は今のところ挙げる事が出来ない。ただ、『古今狂歌袋』の通人風の肖像、就中手にした扇面に見える濃紫の銘から、相当の通人として喝らした人物に違いないと空想するのみである。しかしこの二代目、少なくとも為輕の号を用いては、余り活躍することもなく、この号は二世で途切れた。

話を万象亭に戻せば、彼はこの戲号を僅々数年用いただけで手

離してしまっただけである。後出『無駄酸辛甘』のいう、「悪凶年に及んでは、皆な連中を免れ、会へも不レ出して、狂名をけづること、具体的現われのひとつと言えるだろうか。確かに、既に狂歌師としても、頭株の一人と目されていた竹杖為輕の諱号が、どれ程かの混乱を齎したであろうことは想像に難くないが、この淡白さは、彼自身屢々揚言する江戸っ子の美字でもあったのだろうし、鳴物入りの狂歌壇登場から漸く尻すばみになる、彼の狂歌への関心をも物語っているように思われる。

二、森羅亭万倍

万象亭の晩年、文化五年の秋か冬に書かれたと思しき隨筆「反古籠」夷の紋の条に、「其狂言見たる古老の話せし由、故人一粒万倍語りき」との一節が見える。『狂歌才藏集』には、一粒万倍の作として、以下の二首が載る。

残雪

まだ春の寒さにとけぬはなの先梅さへ雪の頬かぶりして

(巻第一)

鷹狩

くさかれの山のこしよりたつ鳥の羽音に鷹のへをはなつらん

(巻第六)

見立てを用いてきれいにまとめるか、逆にことさら尾籠に傾くのが為輕の狂歌の特徴であり、その意味ではよく師風を伝える狂歌

であるが、それとはかく、この万倍が「田舎芝居」の掛合いで為輕の相手を勤める森羅亭万倍である。

天明六年刊の黄表紙「無束話親玉」五丁裏には、「月池門人森羅亭をた」と記される。この書判をたがまた、「田舎芝居」口絵で森羅亭万倍の掲げた扇に見える（因みに羽織は「散らし、着物に「つなぎ」のである。「無束話親玉」は翌年「新錦面従長崎強飯」と改題され、売れ残りを思わせるのであるが、皆見の限りでは、この他に彼の戯作を知らない。同書に付された万象亭の序に「予か革新の森羅亭万倍か無話書むたきなり」と見え、「才藏集」以前の狂歌集等にもこの名は見出せず、万別・万宝より後の弟子であることが知れる。にも拘わらず彼らを押さえて森羅亭の号を得たについては、他の門人たちが町人であったのに対して万倍が武門にあつたからではないか。寛政改革とともにこの号が消えることが、それを証するように思われる。

さて、森羅亭を冠した万倍は、「繪本あつま鏡」では「万葉意まなはと表記され、以後見えなくなる。同書には真頭も載り、万葉意と万象亭の関係を考える必要はないが、七珍万宝が森羅亭を名乗る寛政五年以前には、森羅亭万倍は完全に戯作界とは縁を切つていたと考えてよいであろう。或いは「反古籠」に「故人一粒万倍」とあるように、早く没したのでもあろうか。いずれにせよ、万象亭の後年の隨筆に、天明朝の戯作者や狂歌師が現われることは少なく、それだけに一粒万倍の名が彼にとって鮮明であつたこと、

親しいながりのあつたであろうことを思わせるのであるが、その実名や経歴となると、二世為輕と同様、皆目見当がつかない。

以上二節で見て来たように、「田舎芝居」の巻頭を飾るほめ言葉の掛合いに立つたのは、決して名前だけの木偶人形ではなく、万象亭の実在の門人であつた。ところが、この門人たちの実在を見えにくくしたのは、かの「東海道中膝栗毛」の呼び水として名高い享和元年刊「田舎芝居」中本型改版の罪であつた。そこでは、天明七年初版における二世為輕・森羅亭万倍のほめ言葉を、「竹杖万倍」一人のせりふに改めてしまつたのである。この間僅かに十四年。いかに小本一冊のことであるとはいえ、天明と享和の間に横たわる寛政という時代について考えずにはおれない。

ところが、享和のこちら側から、戯作の繚乱期天明の彼岸に目を凝らしているひとりの戯作者がいた。「膝栗毛」の作者その人、他でもない十返舎一九である。

三、狐面堂柳郷

「田舎芝居」とりわけ中本型改版の、「膝栗毛」への影響については、既に何度か指摘されて来た。よって、本節では「田舎芝居」と「膝栗毛」との、言わば人間関係的な接点について述べてみたい。

狐面堂柳郷は、万象亭門人としては特異な戯作者である。万の一

字を含まず、かつて万象亭の用いていた号でもなく、四字成語でもない。恐らく、彼の入門した頃には、既に万象亭が門人たちの戯号で万字尽くしをするような戯作への情熱もしくは遊び心を持ってなくなっていたことを示していると思われる。この戯号の初見は、天明六年十一月の後序を持つ（七年正月刊）『万象亭の洒落本』『福神粹語録』であり、万倍の登場より更に遅い。またこの人物の、この戯号での戯作は、筆者の知る限りでは書かれた形跡がない。しかし、『田舎芝居』の役処は、万象亭の当代洒落本批判を繰返した「今世に行るゝ洒落本の。或は妓の耳の垢。又は娼の臍の脂を穿鑿仕たるよふな。片づんだる物とは殊なり」云々という戯者の位置と、前述の二人や天竺老人・千差万別より派手である。その署名は「風来山人之孫弟子」と、序に呼応しており、『福神粹語録』後序に記されるような頻繁な出入り故、天明六、七年の頃特に万象亭に可愛がられたのであろう。柳郷の住む馬喰町から万象亭の住む築地までは、四分の三里程の距離である。（柳郷には柳橋が掛けてあるのだらうし、狐面堂は御面側でもあるのだらう。柳橋から猪牙舟の船頭に御面側かけるのだらうか、と思わず穿つてもみたくなる）

さて、『田舎芝居』『福神粹語録』そして『絵本あつま鏡』と、天明七年に万象亭の周辺にのみその名を見出すことの出来る狐面堂柳橋であるが、彼の用いた「^(注5) 卍扇」の印が、数年を経て数回記される。第一に寛政年間の刊とされる洒落本『面美知之煙』、

そして享和四（文化元）年刊の『膝栗毛』三編である。前者は自序末の「南朝山人酔中識」に並べて「^(注6) 扇」と「笑人」の印、後者は「消冷亭笑丸」の右肩に「品川」左下に「^(注7) 扇」と陰刻の「^(注8) 田笑人」。古典文学全集の頭注で中村幸彦氏が言われるように、南朝山人と消冷亭笑丸とは同一人として間違いないまい。問題は、品川に住する笑丸と日本橋馬喰町の柳郷との関係である。筆者は、これら三書の年代が一世代の間に十分収まること、他にこの印を用いた江戸戯作者を知らないことに加え「面美知之煙」口絵（笑丸画）と『福神粹語録』口絵との相似より、笑丸（南朝山人）と柳郷とは同一人であると考ええる。『福神粹語録』口絵に署名はないが、柳郷画である可能性が高い。万象亭の洒落本（他のジャンルを含めても）の中で『福神粹語録』と『田舎芝居』の挿画は他に見られぬ画風を示す。これら二書に關わった万象亭の門人は柳郷と天竺老人の二人だけであり、二書の筆工を柳郷が勤めていることが明らかである。この時期、万象亭の戯作の画工を勤める可能性のある画師を挙げれば、先ず政美そして式上亭柳郊、滑稽・豊国・歌磨・政演といったところだが、このうちの誰の画とも認め難く、また彼らであれば署名の記される確率が高い。加えて『福神粹語録』『田舎芝居』は板元が異なるものにも拘らず画工は同一人と思われ、特に前者の口絵に描かれた万象亭の肖像は、彼のみならず彼の書齋を知らねば書けないような写実的なものである。これらの条件を勘案するに、二書の画工として考えられるのは、

柳郷以外になく、その画は笑丸画と記された「面美知之姫」の口絵とよく似通うのである。^(注7)

ここで凡爾の見えるもう一例、「膝栗毛」三編の前年享和三年刊一九作黄表紙「十懸杜野狐復讐」序文に「十返舎のあるじ野十仇討美談を狐色なる黄表紙に著し是が始めに言加へよと乞ふ」とある笑丸の口吻を考えると、一九の方から笑丸に近づいて行った風に見える。これはつまり、一九がわざわざ「膝栗毛」の跋を笑丸に乞うたことを示してはいないか。笑丸即ちかつての狐面堂柳郷が、一九が規範と仰ぐ「田舎芝居」への、実際の参加者であり万象亭の門人であったが故に。

先に筆者が述べた人間関係的な「田舎芝居」と「膝栗毛」との接点とは、このことを指す。「膝栗毛」初編の凡例には「館伴女魁儡の風流泊々々の遊戯、その可笑みを純にす」との一条が掲げられ、「巻中に著す夷曲歌は、排設地口を専にす。故に嘲者は笑へ」云々と続く。同二編にも「俚俗の詭言方語のまゝを記して、其おかしみを純にす」と見える。「只可笑を専とすべし」とは、「田舎芝居」序に凝縮した万象亭の戯作論の核心に他ならなかった。確かに「膝栗毛」の出版に当って、一九は万象亭の「戯作の醜論」(「田舎芝居」序)を自らの方法として標榜しているのである。

このように、内容・方法に関する「田舎芝居」と「膝栗毛」の近密さに加え、「田舎芝居」と「膝栗毛」をつなぐ人物の存在を

想定すれば、これら二書の関係が改めて裏付けられるのではないだろうか。

四、天竺老人

竹杖為幞と同様、この戯号もまたかつて万象亭のものであった。天竺浪人(源内)が没した翌安永九年刊の「金のなる木」序「風来六部集」序に「下界閑士天竺老人」と記してから天明三年まで用いられた。ながく天竺浪人と混同されて来たが、林若樹氏の指摘以後区別される。「真女意題」(天明元年刊)「太平楽巻物」(「当世導通記」)「蛇蛻育大通」(同二年刊)といった洒落本「万象亭戯作濫觴」文中などにこの戯号が見えるが、この号を用いていた頃に洒落本の作が多かったのであって、洒落本用の戯号だったというわけではない。そして、天明三年の大田南畝編源内遺文集「飛花落葉」跋に「風来山人遺弟下界閑士天竺老人」と記し、「絵本見立仮響尽」で「天竺老人竹杖為幞」と改号を表明して以来、この号は用いられなくなる。

ところが、前出「福神粹語録」には、四年振りにこの戯号が見られる。この天竺老人が、「田舎芝居」に後語を記した二世天竺老人であった。「福神粹語録」序の凡に龜の書判がこのことを証し、後述「作習酒佐字」五丁裏に「代目天竺老人」と見える。

二世天竺老人は「狂歌師細見」即ち天明三年の時点で既に万象亭の社に加わっている。その頃からの戯号は千鶴万龜、後には

専ら万亀亭を用いた。狂歌壇にて活躍する花江戸住である。「絵本あつま鏡」には「万亀亭花江戸住」、「古今狂歌袋」「才蔵集」には「花江戸住」で載り、同じ天明七年には袋入本「作習酒佐字」が出される。「狂歌画像作者部類」によれば「江戸住俗称山口口吉号万亀亭住銀座町」とのこと。のち感和亭鬼武の「旧観帖」に序を寄せ、千鶴庵万亀の名で読本「久智野石文」(文化五年刊)を書くなど、長く戯作界に関わりを持った人物であったが、二世天竺老人の号が記されたのは、実作では万象亭の序文を持つ「作習酒佐字」のみであり、この名にふさわしい滑稽本や洒落本は書かれた形跡がない。(『旧観帖』序は高木元氏の御示教による。)

このように、天竺老人・竹杖為輕・森羅亭という戯号を、天明五、六年頃次つぎと門人に譲ってしまった万象亭は、天明七年刊の戯作から皆様御存知という極端な戯号を使い始める。冗談にしても、かなり思い切った冗談である。いま詳しく述べる余裕はないが、この戯号に象徴されるような万象亭の「田舎女の大口に似た無神経な健全さ」(中村幸彦氏「戯作論」)もしくはその擬態から、俺が俺がの後期戯作界までは、あと一步の距離ではないか。

五、千差万別

千差堂万別、千差亭万別とも。せんしゃ(じゃ)まんべつと訓みたい。最も古くからの門人である。次の七珍万宝と並んで「裨

史意説年代記」「戯作外題鑑」に載り、「日本文学大辞典」「日本古典文学大辞典」も一項を立てる。また東郷望氏「千差万別とその戯作」(『文学研究』50)も備わるので、ここでは万象亭との関わりを中心に述べたい。

万象亭の洒落本「当世導通記」(天明二年刊)跋がこの戯号の初見である。翌年の宝合の会では、主催者万象亭の門人として狂歌師連中の知遇を得たものと思われる。万別の出品は「こがらしの太刀」、「狂文宝合記」に「万象亭門人千差万別蔵」と記す。「狂歌師細見」には万字屋(竹杖為輕)に「よろづわかつ」と見える。また「万象亭戯作藍鵲」には、春町の「猿蟹還音嘶」道成寺所作事の場面を換した、よく知られる石橋所作事の場面に門人を代表して登場。万象の跋に「突出し新造作者」とある「無駄酸辛甘」(天明五年刊)が、広範な知識を支えとした佳作であったのにも拘らず以後彼の洒落本は刊されず、黄表紙も天明八年から寛政六年にかけて四作と少ない。洒落本大系解題で山口剛氏は、洒落本「猫射羅子」(寛政十一年刊)の万別の跋に「我弟鹿馬軸」とあることから、正徳鹿馬軸を万別の弟かとされたが、詳細は不明。筆者はこの「我弟」、例えば万象亭が源内の「遺弟」と記した如き一種の親しみの表明と考える。

天明八年から黄表紙の作が出され、その戯作活動に寛政改革の影響が見られぬことから、町人であることは間違いないであろう。また、戯作の量といい質といい随分斑気が感じられる。彼が万象

亭門人を称した頃には、万象亭はまだ狂歌連中との交わりは浅く、他の門人たちが狂歌をよくしたのに対して、万別は狂歌を詠んでいない。即ち宝合の会への参加にも拘らずそれ以後天明狂歌壇のお祭り騒ぎとは自ら一線を画した気配が感じられる。このように考え来ると、前掲論文で東氏の言われる、医師か蘭学者かという推測も肯けるところがある。彼の入門当時の万象亭の興味の対象から考えて、同学の士というより遊び仲間という言い方のほうが適切なつき合ひだったのではなからうか。

ところで、『田舎芝居』での千差万別は、天竺老人と並んで校語を付すという、余りばつとしない役回りであった。

六、七珍万宝

前記『神史儼説年代記』『戯作外題鑑』に加え『近世物之本江戸作者部類』『戯作者小伝』にも載り、その素性・経歴の明らかなのが、七珍万宝（まんぼう）、後の二世森羅万家である。（『森羅亭』については万倍がおり三世）この門人については、優に一稿を成すだけの事蹟を持ち、詳細は別の機会に譲りたいと思う。

『狂歌師細見』がその名の見える最初である。天明八年（年表類は天明七年刊『陰徳両方吉事計』を掲げるが未見）以来、専ら黄表紙を書き、筆者の知る限りでは、二十六作を数える。洒落本『美止女南話』咄本『落咄はつわらい』等にも筆を染めた。寛政五年から森羅亭を名乗るが、寛政八年以降は黄表紙の作が止み、

狂歌活動一本となった。以後、天明三年頃から万象亭を介して知友であった、四方歌垣の片腕的存在として四方側の判者をつとめ、宗匠位を得ている。

早く寛政四年には、万宝門人と称する見得坊の黄表紙『為恐肝心場惣袋』が出ているが、以後見得坊の名は見えない。文化十二年刊『四方歌垣翁追善集』には二世万象とは別に万宝の名が見え、これは二世七珍万宝であらう。

万宝の狂歌は既に『才蔵集』に二首収まるが、万象亭・二世天竺老人・二世竹杖為輕が載る『古今狂歌袋』には選ばれていない。彼は『田舎芝居』では後序を書いている。これも柳郷の跋と同様、『神代巻』曰天照世界の親玉速素戔嗚尊の惡陋落を諷ませ給ひ。大疳癰の磐戸隠れより以来。世は閑雲のめつた晒落。次第／＼に増長し。五月鯉如無鱗書を小冊にさへ書著はして。世に行はるゝもの八百万巻。何れも似たり寄たりにして。阿那面白き趣向もなし』云々といった、序の焼き直しである。ただ万宝は、主張を実作で示すべく洒落本『美止女南話』（寛政二年刊）を書いたのであったが、万象亭の模倣の域を出るものではなかった。

この他に、『狂歌師細見』では、北尾派の画師政美（鰐形蕨齋・政演（山東京伝）が万字屋に属し、戯作者岸田杜芳・南仙笑楚・満人、浄瑠璃作者双木千竹・中田林七・吉田二一・豊竹茶里丸、狂歌師鯉滝昇・蒂野横好らの名が見え、鳴滝哲人や小箴管伎、玉

源小僧も万象亭に近しかった。岸田杜芳や鹿部真頭は、太平有象・柄江万治と、それぞれ万象の一字ずつをとった戲号を持っていた程である。芝廬屋山陽ももと大井千尋と名乗って万象傘下にあったし、三陀羅法師も天明期には千秋万歳という万象門の狂歌師であつたと思われる。

さて、彼らについては暫く措き、『田舎芝居』に戻れば、以上見て来たように、ここに名を連ねた竹枝為軒・森羅亭万倍・天竺老人・千差万別・七珍万宝・狐面堂柳郷は、すべて万象亭の實在の門人であつた。万象亭を加えて七人、と話を進めたいが、その前に序を記した風来山人門生無名子と作者万象亭を等号で結んでおく必要がある。

無名子とは、『里のをだまき評』（安永三年成）跋、『菩提樹之弁』（安永七年刊）跋、前出『金のなる木』と、万象亭がまだ源内門にあつた安永期に用いていた戲号であり、宝暦十一年成、『飛花落葉』に収められる「木に餅の生弁」がその出処である。^(金)

この戲号は門人に譲られた形跡を見ないし、『金のなる木』以後、この戲号が見られるのは、後にも先にも『田舎芝居』序のみである。無名子と同様、風来山人も門人に譲られることはなく、後になって万象亭自身がこの号を名乗つてもいい。彼の源内に対する思い入れは並大抵のものではなく、晩年に至るまで繰り返して追慕が語られ、最晩年には突然源内の浄瑠璃作者としての戲号福内鬼外を名乗るなど、源内のものをそのまま受け継いだ戲号は、

手離すことをしなかった。よって、源内ともっとも関わりの深い無名子の号も、門人に譲ることはしなかったと考える。その無名子は『田舎芝居』序で、「予が只弟子の万象亭」と一応仮構しながら、末尾では「そこは万象平気なものなり」と正体を顕わしているし、柳郷と万宝が専ら復唱しているのは、序で無名子の言う「予が兄弟子の万象亭調事あり。」以前の部分なのである。

万象亭が「風来山人門生無名子」をここで名乗つたのは、翌年の『風来仮名文選』の序に端的に表われているように、いま一度、風来山人の正統を声高に表明しておきたかつたからに他なるまい。彼の当代洒落本批判は、言葉を換えれば「源内に焔れ」ということであつた。

かくて、万象亭を加えて七人の戯作者たちは、『田舎芝居』と相前後して書かれた『極神粋語録』と響き合つた戯作の世界で、天明七年のお正月に、七福神の気分が味わえる、という仕掛けであつた。

そしてそれ以上に、これから万象亭一門の目ざす、戯作の方向性を示した、言わば宝船の旗上げの気分も、この一冊の小本には込められていたに違いない。でなければ、どうしてこれだけの周到さで、当代洒落本批判を満載する必要があつただろう。結果的に見れば、この年六月の定信老中君任で蓋を開けた新しい時代の風に、万象亭は戯作の口を嚙まねばならず、『田舎芝居』の主眼は、それが捨て科白であつたかのような貌を見せて断ち切れた。^(金)

以後万象一門の戯作には見るもの少なく、京伝を筆頭とする新しい戯作の前になす術を持たなかった。

本稿の内容だけでなく万象亭の姿勢云々を導き出すことは到底出来ないう、一点のみ言えることがある。一人の人間が幾つかの仮号を用いて成した一書と、たとえ門人であろうと、それが戯作であろうと、何人かの人物が同じ方向を向いて成した一書とでは、違つた把え方をする必要がありはしないか。

(注)

1、現在最も信頼に足る日本古典文学大辞典及び洒落本大成の解題で水野稔氏は、それぞれ竹杖為輕・森羅亭万倍、竹杖為輕・天竺老人が万象亭の仮号であるとされる。

2、日付の明らかな最も早い例は、同年十月十三日成『屁放大神大御伝』に見える「竹杖翁為輕」。(天理善本叢書蜀山人集)

3、『狂歌新玉集』にも。また粕谷宏紀氏「石川雅望研究」は

「絵本八十字治川」にも「竹杖翁為輕」で載るとされるが未見。

4、吉原角玉屋の遊女源紫。京伝の洒落本「傾城鏡」には、競之の流れをくんだ能書故に太夫の位をつぎ「聊中にならび無き艶色也」、後出「無駄酸辛甘」は、女郎の芸尽しの筆頭に濃紫の墨絵を挙げる。

5、加賀文庫蔵の『根無草會我和物』十五ウ・『可然苦者楽種』(「書目年表」は入木とするが)一オにも朱印の「己扇」が見え

るが、「笑丸作」の印と同じく、製本より後に捺されたもの。『花闘観梅魁』一オの「笑丸誌」も同様である。

6、一九と笑丸の交遊等については、更に検討を加えたい。

7、一九作「柳討菱術巻」の後摺本を笑丸作とする『書目年表』の説は、改竄本(国会本)を見たものであろう。

8、洒落本大成第十八巻解題に紹介される「白狐通^{後篇}」の序には「千差万別天竺老人」との署名が記されるところであるが、これらは同一人の二つの号ではあり得ず、このことは中野三敏氏の言われる偽撰の書の傍証ともなり得よう。

9、この年中良は八才。そこに描かれる無名子が彼であるとは考えられない。同様に明和五年刊「猿陰隠逸伝」(この年中良十五才)の無名禪師も微妙なところである。

10、既に自作を発表しにくい状況の万象亭が、「飛花落葉」の序跋等を削り、自らの序を掲げて行なった改題再版。その序は「田舎芝居」序の主旨に通ずる。

11、学燈社版日本文学全史で中野三敏氏は、「田舎芝居」序を洒落本に対する絶縁状ととらえられたが、筆者はむしろ逆に、言わば挑戦状と考えるものである。

○本稿は昭和五十九年度岡山大学国語国文学会(六・三)における口頭発表をもとに、同年十二月二十八日に礎稿を得たものである。(東京都立大学大学院研究生)